腱鞘炎に悲鳴
西成区の飲食店経営者
～開店前から行列続く～

西成区の飲食店経営者の中で腱鞘炎が報告されている模様。山王の飲食店住み込み勤務足立喜美さん(19)によると朝6時の開店前から店前に何十人もの行列ができ、夜閉店するまでお客が途切れない、人が多すぎてカウンターは斜め立ち。あまりの混雑ぶりにレシートを確認する時間も惜しく、常時二～三十人もの会計を全て記憶で計算するのだという。ゼネコン全盛で景気の良い労働者たちは金払いもよく、チップで1万円出る事もある。

四畳半に札の山

札束を踏みつけては一杯に詰め込んだ一斗缶が日に四回は店の奥の四畳半に運び込まれ、部屋中に広げられたお札の山を店主が一枚ずつ数えるのだが、これが頻発する腱鞘炎の原因であるとされており、銀行員の時間外出張などの対策も検討されている。

九死に一生
しじみ採りに川を横断中

大和川にしじみ採りに出かけた糸賀陽治さん(11)が気づくとチンチン電車は既に川を越えようとしていた。一つ前の駅で下車すれば川口に座礁している潜航艇の残骸の近くのしじみがたくさん採れる場所に近い。七人もの年下の子供達を連れていた陽治さんは遠回りで橋を渡って戻ることを嫌い川を一気に渡ろうとした。浅いとはいえかなりの水の力に危なく流されそうになりながら両手両脇には子供達、頭の上に服をくくりつけ、なんとか対岸まで

「潜航艇はどっちや!」

「必死やった」

辿り着き事なきを得た。陽治さんはその後の会見で「電車代は一律5円で5円あれば関東炊きが食べられるのに勿体ないと、歩いて戻ることを考えたが死ぬかと思った、子供達を守らねばと必死だった」と語る。大浜の海水浴場への電車では大人に混じって改札を抜け5円をごまかし関東炊きを買おうとする小学生が後をたたず、対策が急がれている。

社説
知恵を共有し街を共に生きる

日本には「敬老の日」という立派な記念日があるが、もともと兵庫県のある村の村長と助役が「老人を大切にし、年寄りの知恵を借りて村作りをしよう」という発想から農閑期に「としよりの日」という日を設定したものが全国に拡がったのだという。今ではすっかり形骸化してただ祝日だとか、祖父母にプレゼントをする日のような認識でいる場合も多い。本来の目的である「知恵を借りて村作り」という部分が消えてしまっているのだ。

お年寄り達には長い時を過ごしたからこそ得られる「知恵」がある。一年に一日だけ優しくするばかりが敬老ではなく、日頃から思い出話や知識に耳を傾け、その個人的な歴史体験の中から、これからの我々がどのように生きて行けば良いのかのヒントをつかむ事こそが正しい意味での敬老なのだろう。西成での地道な試みである「なるへそ新聞」が暮らし中で昔の話を聞いていくことを日常化し、一緒に街を生きる事が出来ればと願っている。

●求人広告●
新聞記者
西成なるへそ新聞
男女問はず・経験不問
学歴不問
弘王丁の五の三一 新福寿荘内
ブレーカープロジェクト
(電話)〇七〇-五〇四六-八六六七

夜中の餅つき
～家族思い決行～

歳末の書き入れ時を迎えた飛田本通商店街は、多くの客で賑わう。紳士用の帽子を販売する「ニューベロア堂」は、一日最高で百五十個の帽子を売り上げる盛況ぶり。店主の古川塩八さん(42)は「商売人は他人が遊んでる時に仕事をするもんや」と普段から小学生の息子晶弘さん(11)に語り、盆も正月も店を開けていた。しかし今年は善段年末らしい行事を経験していない家族を思い、餅つきをと決断。閉店後の午後十時過ぎ頃からペッタンペッタンと餅つき大会が始まった。仕事後の餅つきは体に堪えた様子で、「家族は喜んだがもうこりごり」と塩八さんは話す。

穴堀り団御用
・動機に疑問・

火曜夜八時、七號台の大規模な穴掘り団が警察によりこってり叱られた。チンチン電車の線路下の土手をスコップ等で掘り茶屋側まで掘い抜いた疑いで逮捕された計二十人程の穴掘り団のメンバー篠原勇吉によれば構成員は小学生から中学までリーダーの(命令)は親よりも大事という。グループ最年少の末っ子しんちゃん(8)は「寒いし、動けば暖かくなると思って」「穴掘って向こう側へ通るだけや」などで、たった一日で十メートル近くの土手を白昼堂々大胆な手口に似つかわしくない暖昧な供述を繰り返している。警察は道路で無断りやかくれんぼなどに興じているものの、同グループは飛田門灯ベチャーの撲ち逃げ事件との関連を疑われており、更に余罪が追求されている。

黒い新作に期待

白夏出版で一〇〇部発行し、阿倍野の書店でベストセラーとなった同人誌「風車」の著者・黒田信子氏の新連載が始まる。詩的な文体で西成の風景を描き出す黒田氏の待望の新作を、依頼執筆中。■黒田信子(くろだのぶこ)鹿児島市生まれ。生家の近くに住んでいたNHK作家宮川一郎氏の縁で大阪NHKでレポーターとして勤務。その後昭和44年に同人誌「風車」第一号発刊。昭和48年まで大阪NHKでレポーターとして勤務。その後昭和44年に同人誌「風車」第一号発刊。昭和48年まで大

人と

雨森信さん

雨森さんは、一九六九年生まれのフリーランス・キュレーターだ。二〇〇三年より大阪市の文化事業としてブレーカープロジェクトを企画・実施している。現代における「芸術の役割」を再考する場として、既存の美術空間やシステムではおさまりきらない独自の表現活動を開拓するアーティストとともに、地域に根ざした表現活動を探求していきたいと語る。

異人の墓で夕涼み

野球小僧の夏の楽しみ

金堀小学校の裏は粘土山と呼ばれる赤土の高台で真人墓地と広場になっている。普段は俗田の壁に軟式ボールをあてて練習しているが、皆でとなると「異人墓地いくぞ」と声をかけ広場に行く。

ピッチャーの長野君や外野手のしげ君(10)は平たくて土が少し丸い異人さんの墓が、どこの国の墓なのか不思議に思いながらも、暑い季節のタオに少し冷えた墓石が野球としてのあとの火照った頬にひんやりと気持ちがよく、つい寝っころんでいる。

教養恵太郎の百年目の新連載
河原 喜子(実妹)

8文字熟語のスタートです。新聞を読むいろんな物を見る。人との出会い、三度の食事、その他いろんな方面から思うがまゝに8文字熟語に書いていきます。これからも続くでしょう。お楽しみに

西成お地蔵様巡り(一)

天王寺から天下茶屋を結ぶ南海一本線での事故が多かった。旅の行者に「黒龍さんのそばに埋ってはるお地蔵さんを祀りなさい」と言われた住民が、力を合わせて祠をつくって祀りすると、不思議なことに事故も怪我もなくなったんよ。このそばのアパートからは出世した人が多かったよ!!(柳本東子)

のんびり夫に怒り

昨日正午過ぎ、天王寺動物園(天王寺区茶臼山一)に勤務の福岡京子さん(33)の次男・茂えちゃん(4)が、同園内で姿を消したのに気づいた。京子さんは当時園内の食堂で勤務中だったが、連絡を受けて食堂を飛び出し捜索にあたった。同日夕、泣いている茂えちゃんを見つけた通行人が保護し、西成警察署へ送り届け、夫の重機さんが警察署に涙と鼻水まみれの茂えちゃんを迎えに行った。京子さんは「池に落ちたのではないかと気が気でなかった」と語ったが、保護した通行人の連絡先を聞いて帰らなかったのんびり屋の重機さんに怒りを隠せない様子だった。

迷子の顔

【文化】オ・エスがり記

山王には大衆演芸場がある。昭和年代後期のすさに演芸(伝統)の地にふさわしい所でもある。演題は「喧嘩劇」「博多人形」「女形芝居」「意知意憎さん」そして拉致を題材とした「拉致、母千里」等。特筆すべきは「意知意憎さん」であろう。下達ものとはいえ現代にもマッチする工ピソードを交えた功少な芝居であり、嫁と姑のペーソスは見事である。加えて劇中での姑の役者(訳田ひろし)の奮闘振りを表現する時のタオルを固く巻き、一気にハチマキにする時の鮮やかさ、さすが幼い時から鍛えられた役者魂そのものの仕草である。妻は姑が嫁に何を訴えているのか観る人に考えさせる妙がある。そして「女形芝居」これも圧巻である。衣裳といい化粧といい又扇子のなんと上手く操ること。そして身の熟し方。唖然とする。「女でもこんな綺麗な人いないで」という一言。男がいたが、ほんとにそう思った。しかしそうでない人もいる。いわゆる白い目が気になる人、これも又大衆演芸の神髄かなと思う。(永岡吉弘)

新福寿荘
若手のアーティストやクリエイターの入居者募集中。
詳しくは Breaker Project ☎070-5046-8667

人法社福会社
会りどみ王山
5-6-1王山